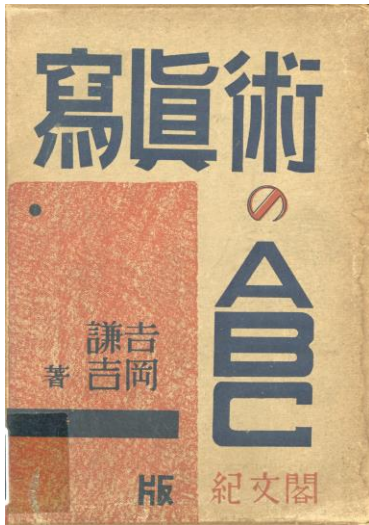


## 写真人とその本 4 /北野邦雄

日本カメラ博物館 JCII ライブラリー  
学芸員 宮崎真二

きたのくにお  
北野邦雄 (1910-2000) は、幼い頃から写真に興味を持ち『写真の趣味』41号 (小西六本店・1924年) の質疑応答欄などに投稿していました。1929年ごろから本名の「吉岡謙吉」として写真関連著述を開始します。東京外国語学校 (現: 東京外国語大学) 卒業後、1932年から東北帝国大学医学部などでドイツ語の教職に就きますが、1934年から出身地の北海道に因んだ筆名を使い始め、次第に写真関連著述に専念します。1936年には『カメラ』の編集部員となり、1939年に独立して東京・銀座に出版社「光画荘」を設立後、11月に『光画月刊』を創刊しました。復員後、1947年に同社から『光画月刊』を復刊し、以降『写真工業』(1952年6月号~1961年1月号まで主幹)ほかの写真雑誌を手掛けました。



『写真術のABC』

個人著作は70冊以上にわたり、『写真術のABC』(紀文閣・1933年)、『百万人の写真術』(光画荘・1940年)などの技法書をはじめ、『ローライ写真術』(アルス・1935年)、『高級カメラの選び方』(同・1939年)、『国産ローライの研究』(光画荘・1943年)、『北野邦雄写真機叢書』(同・1946年~)など、カメラの使い方を解説したものが多くあります。

大学の専攻分野であり「ドイツ語ならば話すこと、書くこと、譯すことに於て誰にも負けぬ自信はあります」(『カメラ』1938年9月号より)と自負する語学力を持ち、『カメラとドイツ』(光画荘・1951年)では、同年に開催されたカメラ・映画機材見本市「フォトキナ」の訪問記を中心に、カメラ産業先進国である西ドイツの写真事情と生活習慣などを紹介しています。また1954年のフォトキナで電撃発表された「ライカM3」のニュースをいち早く『写真工業』で伝えるなど、海外新製品情報において他誌をリードしました。また『現代カメラ新書 日英独カメラの用語』(朝日ソノラマ・1976年)も、専門用語に長けた語学力を生かした書籍です。



『カメラとドイツ』

1967年には「ペンタックス・ギャラリー」の初代館長に就任し、同館所蔵品を基に解説を加えた『カメラのコレクション』を編集しました。その後「日本クラシックカメラ協会」の会長となり、1974年に解説書となる『クラシックカメラ』を発行しました。また『写真工業』では、1974年9月号から1977年12月号まで「クラシックカメラ入門」、「世界の名機」、「一眼レフ物語」の題名で連載を行ったほか、『現代カメラ新書 世界の珍品カメラ』(朝日ソノラマ・1975年)を著し、『カメラレビュー クラシックカメラ専科』では創刊号から寄稿しています。